

【ポスター発表】

社会福祉領域における「エピソード記述」の援用可能性について（その2）

－研究方法としての可能性－

○ 同志社大学 森口弘美 (4484)

李善恵 (同志社大学・7652)、市瀬晶子 (関西学院大学・7583)、大倉高志 (同志社大学・8257)

小山聡子 (日本女子大学・2297)、加納光子 (武庫川女子大学・955)、種橋征子 (関西大学・5861)

藤本芳明 (同志社大学大学院・8794)、松本理沙 (同志社大学大学院・8113)、木原活信 (同志社大学・1851)

[キーワード] エピソード記述、質的アプローチ、社会福祉研究方法

1. 研究目的

鯨岡が紹介する「エピソード記述」は質的アプローチの方法の一つであり、関与観察、あるいはインタビューや臨床面接をとおしてとらえられた事象に「生の実相のあるがままに迫る」(鯨岡 2005) ための方法として生涯発達研究の分野から提起されたものである。

記述の仕方に決まった形式があるわけではないが、(1)とらえたい事象の客観的な流れを描き出し、読み手がおおよその共通理解が得られる第一段階、(2)「それを描き出したいと思いついた書き手の背景(暗黙の理論)」とエピソードとの関連を「多方面にわたって吟味し、その意味の全幅を押さえる」第二段階の二つの要素で構成される。とりわけ書き手の主観をとおして捉えられたことについて、なぜその場面をエピソードとして描こうと思ったか、なぜそのように感じたのかを問うことでその意味(メタ意味)を深める第二段階が重要で、鯨岡はこの段階を踏むことで記述されたエピソードが体験記や記録ではない「質的アプローチにつながる」としている(鯨岡 2005)。

本報告の目的は、社会福祉領域における研究において「エピソード記述」を援用することの意義を示すことである。

2. 研究の視点および方法

文献等による理論的な整理を行うとともに、「エピソード記述」を実際に試みたうえで、研究会(同志社大学社会福祉教育・研究支援センターのプロジェクト)における検証により、社会福祉研究に活用する意義と可能性を検討した。なお、実際に試みた「エピソード記述」については、報告当日に紹介する。

3. 倫理的配慮

他説の引用に際しては、自説と他説の峻別を明確にするとともに、引用元および参考文献を明記する。また、フィールドワークや調査をもとにした「エピソード記述」を紹介する際には匿名性に配慮する。

4. 研究結果

1) 言語化しきれない体験や気づきを伝えることができる

鯨岡と同じ心理学領域で研究方法としての「エピソード記述」について論じている大倉

(2008)は、「エピソード記述」の特質について、心理学において大事なものは「語りの中では語られなかった思いや、協力者がそう簡単には語りきれなかった豊穡な体験」であり、それらを捉えるためには逐語録の分析よりも「語り口、身振り、文脈、その場の雰囲気といった諸々の要素についての記述、さらにはその語りや聞き手にどのような感性的・身体的な体験を引き起こしたかについての記述」が有効であるという見解を示している。

社会福祉研究においても、心理学と同じように「語られなかった思いや、協力者がそう簡単には語りきれなかった豊穡な体験」をとらえることは極めて重要である。とりわけ援助実践に関わる社会福祉研究においてはクライアントあるいは社会的弱者等の言葉にできないニーズを捉え、これまで経験してきた苦悩への理解が欠かせないからである。

しかしながら、心理学が人の心に対する「人間的な理解」を目指す(大倉 2008)のに対して、社会福祉研究が目指すものの範疇には、ニーズや苦悩を理解するだけでなく、それらの変容が含まれるべきである。社会福祉研究において「エピソード記述」は、「社会福祉課題に対する社会的な理解の変容」を目指すことができる。

2) 研究者自身の主観を考察することができる

「エピソード記述」の重要な特徴が、書き手の主観を考察対象にできるという点である。報告者らが行っている研究会においてはこれまで、実習先あるいは就労先のフィールドで利用者に対峙したときの体験や、自らの家族とのコミュニケーションの場面などを「エピソード記述」として書き起こし、ディスカッションをとおしてメタ意味を深める試みを行ってきた。そうした試みをとおして、それらの体験や場面において自分自身が主観的に感じたことや考えたこと、またその際の判断や気づきなどをじっくり振り返りながら言語化することで、書き手自身がどのような価値基準、すなわち援助観や家族観、人間観をもっていたかが明らかになっていった。

社会福祉援助実践においては、援助者自身が自らの価値基準に自覚的になることが重要であるが、研究者が社会福祉に関わる調査研究を行う際も同じことがいえる。「エピソード記述」は研究者自身が、自分自身の価値基準に気づきそれを考察対象として研究できる手法である。

5. 考察

「社会福祉課題に対する社会的な理解の変容」を促すためにはさまざまな道筋があるが、次のような一つの道筋として「エピソード記述」を位置付けることができる。すなわち、研究者自身が「エピソード記述」をとおして自分の主観に感じ取られたことをメタ分析し言語化することで、研究者をも含むコミュニティや社会で自明のものとしてされていた価値基準や社会規範を看破し、社会福祉課題に関わる社会的な理解を変容させる可能性がある。

【参考文献】

- ・ 鯨岡峻 (2005) 「エピソード記述入門—実践と質的研究のために」 東京大学出版会
- ・ 大倉得史 (2008) 「語り合う質的心理学—体験に寄り添う知を求めて」 ナカニシヤ出版